



UnifyVISION Release2からRelease3以降の上位リリースへのバージョンアップ

UnifyVISION Release2インストールディレクトリ c:¥vision2
UnifyVISION 新リリースインストールディレクトリ c:¥vision_new

注意：UnifyVISION 新リリースがインストールされている必要があります。
UnifyVISION Release2はコンバージョン作業には必要ありません。

1. UnifyVISION Releaseアプリケーションの変換

Unify VISION Releaseの開発環境には、Release2のアプリケーションを 新リリースフォーマットに自動的にアップグレードする機能がある。（パーティションに分割されたアプリケーションを除く）

ここでは、その手順について説明する。

Step1 UnifyVISION 新リリースの環境変数の設定を行う

```
PATH=c:¥vision_new¥bin:¥PATH  
VISION_HOME=c:¥vision_new  
LANGDIR=jpn_sjis  
DISPLAY=hostname:0.0  
HOME=c:¥vis_home
```

（HOMEはRelease2の開発環境のHOMEを指定する）

注）これらの設定は、使用する環境により変更する。

Step2 新リリースの開発環境を起動する。

Step3 新リリースの開発環境で、Release2のプロジェクトまたはフォルダをオープンすると自動的にアップグレードを行うためのアップグレード・ダイアログが表示される。

Step4 アップグレード・ダイアログの使用法

ダイアログでは、個々のアプリケーション、ライブラリ、またはリポジトリを段階的にアップグレードするか、1度に全てをアップグレードするかを選択できる。以下のオプションの中から選択しアップグレードを実行する。実行後、新リリースのクラス・ライブラリが自動的に作成される。

- | | |
|---------------|--|
| アップグレード (U) | 指示されたオブジェクトだけを新リリースのクラス・ライブラリにアップグレードする。
アップグレードされる項目の名前を表示するには、ドロップダウン・リストを使用する。 |
| 全てアップグレード (A) | 全ての項目（アプリケーション、リポジトリ、オブジェクト・ライブラリ）を新リリースのクラス・ライブラリにアップグレードする。
アップグレードの後でクラス・ライブラリのアイコンが Folder ウィンドウに表示される。 |
| スキップ (S) | 指示されたオブジェクトをアップグレードしない。 |

2. [分散] パネルでパーティション・グループ・プロファイルの名前を指定する。パーティション・グループはランタイムにuorouterユーティリティ・プロセスによって管理される。
3. アプリケーション・ネットワークの全てのホストに対して、ホスト構成ファイルを使用してパーティションの起動コマンドを指定する。
(デフォルト:\$VISION_HOME¥lib¥uohost.ini)
4. uohostdユーティリティを使用してグローバル・ネームサービスを起動。
(uvnamedユーティリティは使用できない)

Step4 手作業によるサービス・クラスのアップグレードの手順

1. 新リリースの関連するクラス・ライブラリのVISIONクラス・ブラウザ・ウィンドウでServiceクラスのサブクラスを作成する。
2. クラスのスクリプトを編集する。
3. サービスにPRIVATE変数があれば、PRIVATEセクションを追加し、_CREATEグローバル関数の各変数をPRIVATEセクションにコピーする。
4. Release2のサービスにコンストラクタ _CREATEがあれば、ON CREATEメソッドを追加し、_CREATEグローバル関数に入っている文をON CREATEメソッドにコピーする。
5. Release2のサービスにデストラクタ_DESTROYがあれば、ON DESTROYメソッドを追加し、_DESTROYグローバル関数に入っている文をON DESTROYメソッドにコピーする。
6. Release2のサービス・インタフェース内で宣言されている関数ごとに同じ名前でMETHODとパラメータ宣言を作成する。メソッドのグローバル関数内の文を新しいサービス・クラスのMETHODにコピーする。
7. Release2サービス内のグローバル関数ごとに（サービス・インタフェースにはない、サービスのローカル関数）新しいサービスクラス内にLOCAL FUNCTIONセクションを作成し、Release2のグローバル関数の内容に対応するローカル関数にコピーする。

3. Release2アプリケーションをランタイムでそのまま使用する

(パーティションに分割しているアプリケーションを除く)

パーティションに分割していないRelease2のUnify VISIONアプリケーションは、新リリースのVISIONランタイム・マネージャでそのまま実行することができる。

アプリケーションを再コンパイルする必要もない。

Step1 UnifyVISION 新リリースの環境変数の設定を行う

```
PATH=c:¥vision_new¥bin:$PATH
VISION_HOME=c:¥vision_new
LANGDIR=jpn_sjis
DISPLAY=hostname:0.0
HOME=c:¥vis_home
```

(HOMEはRelease2の開発環境のHOMEを指定する)

注) これらの設定は、使用する環境により変更する。

Step2 新リリースの開発環境を起動する。



Step3 Release2のアプリケーション、オブジェクト・ライブラリ、リポジトリ・コンテナは、Release2のアイコンのまま 新リリースの開発環境で表示される。これらに対して実行できる操作は、カット、コピー、ペースト、削除、エクスポート、実行、デバッグに限られる。